

## 〔論文要約〕

# 戦前期日本における職業婦人イメージの形成と変容に関する歴史社会学的研究

濱 貴子

本研究では、戦前期の「職業婦人」イメージの分析を通じて、中流女性と職業をめぐるジェンダー秩序の形成と変容のプロセスを、計量分析を通じた実証的アプローチならびに言説分析を通じた社会構築主義的アプローチにより歴史社会学的に明らかにした。

序章「職業婦人研究の課題と方法」では、戦前期の職業婦人に関する先行研究を整理したうえで残された課題について検討し、本研究の視角と方法、よりマクロなレベルでの研究の位置づけについて明確化した。

先行研究の課題としては、国勢調査や高等女学校卒業生の進路調査について、経年変化や地域間の差異に配慮し、よりきめ細やかに職業婦人の置かれた状況を実証的に明らかにする余地が残されていた。また、大正後期から昭和戦前期における職業婦人イメージの形成と変容、良妻賢母との関係性の変化については解明されていなかった。くわえて、先行研究では多面的でバラバラな職業婦人イメージが並立しているため、それらを整理し、それぞれのイメージの関係性を紡ぎなおすことが課題として残されていた。

以上、先行研究の検討をふまえて、本研究では、女性労働ならびに女子中等教育卒業者に占める「職業婦人」とその変化に関する計量的分析、社会における「職業婦人」イメージの形成と変容に関する言説分析を行うこととした。また、それらの分析を通じて近代日本における中流女性をめぐるジェンダー秩序の形成と変容をより明瞭にみるのが可能になるという本研究の意義についても論じた。

第1部「戦前期における職業婦人の状況」では、戦前期に行われた各種統計調査の結果から「職業婦人」の置かれた状況とその変化を計量的に明らかにした。

第1章「社会統計調査からみる職業婦人」では、戦前期の女性労働全体における職業婦人の位置づけとその変化を国勢調査から計量的に明らかにするとともに、東京における調査年の異なる4つの職業婦人に関する調査を取り上げ、それぞれの調査概要、実施の経緯、職業婦人の定義、調査項目の比較を通じて職業婦人をめぐる行政の視点の変化とその意味を考察した。

国勢調査からは戦前期における女性有業者の増加と職域の広がりを確認したうえで、主要な「職業婦人」として位置づけられた商業・交通業・公務自由業といった第3次産業に従事する女性は、新しい産業であり、若年層・未婚者の割合が相対的に高く、他産業よりも地位の高い者の占める割合が相対的に高く、おもに都市部において急速に存在感を増していたことを明らかにした。

東京において行われた「職業婦人に関する調査」では、職業婦人の位置づけが定まっていなかった1930年代のはじめまでは大企業を中心に大規模なアンケート調査が行われ、その属性や思想、希望、長所・短所などがまとめられていった。そのなかで待遇改善の提言などもみられたが、1931年の調査において就職理由が「家計補助」であることが繰り返し強調されるなかで、家計補助のために働き、思想的にも地味で脅威とされないこととみなされ、低賃金で就業期間も短い周辺的な存在として労働市場において位置づけられていった。職業婦

人に関する社会統計調査は、職業婦人の属性や状況を把握することのみにとどまらず、社会における職業婦人の位置づけについても小さくない影響を及ぼしていた。

第2章「学歴と職業婦人」では、戦前期における高等女学校卒業生の就職動向について、『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』における3時点のデータから計量的に明らかにした。高等女学校生卒業生の就職率は、1920年から1930年にかけて高等女学校入学率がエリート段階からマス段階へ移行するなかで、卒業生の家居率の高まり＝「良妻賢母化」が進んだことにより全国的に低下した。一方、1930年から1938年にかけては就職要求の高まりのなかで都市部を中心に就職率は全国的に高まっていき、徐々に「職業婦人化」も進んでいった。

その背景として、第一に、エリート段階からマス段階へと高等女学校入学率が移行するなかで第1次産業比率の高い農業県である女性有業者比率の高い県においては学歴の地位表示機能が強く働くようになっていったこと、第二に、第3次産業の発達によって、高等女学校卒業生にとってもリスペクタブルな職場が都市部を中心に次第に開かれていったことが示唆された。

第II部『『職業婦人』イメージの形成と変容』では、戦前期に発行された読者層の異なる複数の婦人雑誌や新聞における「職業婦人」イメージの形成と変容を明らかにした。

第3章「婦人雑誌のなかの職業婦人」では、読者層の異なる『婦人公論』『主婦之友』『婦人倶楽部』の3つの婦人雑誌を対象として、女性の職業の登場頻度と記事ジャンルの分析から計量的に各誌における「職業婦人」イメージをほかの働く女性のカテゴリと比較しつつ明らかにした。3誌においてはおもに公務自由業や商業分野の職業に就く女性が「職業婦人」として登場するケースが多く、「事務員」「店員・売り子」「飲食店給仕」「速記者・タイピスト」「学校長・教職員」の5つの職業は3誌とも典型的な職業婦人の職業として共通していた。さらに「学校長・教職員」はどの雑誌においても女性の就く職業全体のなかで認知度や評価・位置も一定以上の職業婦人の職業であった。

また、各誌において職業婦人が登場する記事ジャンルにも差異がみられ、『婦人公論』では「論説」の割合が高く、おもにその是非を論じられる存在として、『主婦之友』では「実用」の割合が高く、おもに一定の視点から「役立つ」と編集部が判断した記事を消費・学習する存在として、『婦人倶楽部』では「手記」の割合が高く、ある程度の主体性を持ちつつもおもに一定のテーマにそった自身の側面を語らせられる存在としてあつかわれることが多かったと推察される。さらに、どの雑誌においても職業婦人は頻繁に登場するわけではなく、マイノリティであった。

第4章『『婦人公論』における職業婦人イメージの形成と変容——『社会変革者』から『未来の良妻賢母』への急旋回——』では、『婦人公論』における職業婦人イメージの形成と変容を明らかにした。

『婦人公論』の手記・レポートの成功記事で頻繁に取り上げられていたのは全期間を通じて「たしなみ系職業」に従事する女性であった。一方で、「学術教養系職業婦人」や「事務・サービス系職業婦人」の成功はあまり掲載されなかった一方で、これらの職業婦人に対しては暴露記事が高い割合で掲載され、職業に就くことによる不貞・墮落といった不品行が詳細に描かれていた。また、実用記事においては第2期に「事務・サービス系職業婦人」に対して結婚という成功へ向けた「処世」が職業婦人の成功として位置づけられていった。

論説の分析では、職業婦人イメージは、社会運動・婦人運動の盛んであった第1期には、おもに理想的な「社会変革者」を中心としたイメージと「母としての天職を失う女」というイメージが対照的に描かれていた。しかし、女性解放運動が衰えるとともに徐々に戦争へ向けて社会における統制が強まっていった第2期には、第1期の「社会変革者」イメージは稀薄化し、「自由を尊重されるべき存在」「母性を保護されるべき存在」として描かれた。一方、第1期の「母としての天職を失う女」イメージに替わって、職業婦人は「未来の良妻賢母」として、近代的な良妻賢母に接続された存在として描かれるようになっていった。

『婦人公論』における職業婦人イメージを通じて、実際に働くこととは距離のある主要読者層の中流家庭の教養女性は社会的なことがらへの関心を高め、社会へ向けて自身を開いていったと考えられる。

第5章『『主婦之友』における職業婦人イメージの形成と変容——『職業婦人』と『主婦』の接続——』では、『主婦之友』における職業婦人イメージの形成と変容を明らかにした。

手記・レポートの成功記事で頻繁に取り上げられていたのは「内職・副業」であった。一方、「職業婦人」については成功記事の割合は低く、対して暴露記事の割合が高く、職場における異性からの誘惑を中心として職場でトラブルを抱えている状況が提示されていた。

実用記事についてみると、「内職・副業」では、成功しやすい職種や成功へ向けたハウツーが紹介されていた。一方で、「職業婦人」に対して説かれた「成功」は、男性就業者と競わず、日々の職場で周囲と協調しながら大過なく目の前の仕事を能率的にうまくやっていく「処世」が「成功」として強調されていた。第2期には処世という「成功」のための感情管理がさらに幸福な結婚という「成功」と結びつけられ、結婚後職を辞し主婦になることが「憧れ」「幸福」であると意味づけられた。

論説の分析では、第1期は、女性は妻・母という天職を考慮すべきで、職業婦人は腰掛的で誘惑に陥りやすいとみなされ、女性の就職に否定的な見方が大半であった。第2期には、職業生活を通じて主婦にも必要とされる忍耐強さや感情管理能力を身につけられると説かれ、学卒後の女性の就職は「娘」の花嫁準備教育の一環として推奨されていった。さらに、職場において預かった「娘」の貞操を結婚まで擁護すべきという見方が強まっていった。

このようなプロセスをへて『主婦之友』では「職業婦人」と「主婦」のイメージは接続され、「結婚＝幸せな主婦」という「成功」の途上にある未熟な「娘」として従属的な地位に置かれた職業婦人を引き立て役として「主婦」という存在の正当性が強化されていった。

第6章『『婦人倶楽部』における職業婦人イメージの形成と変容——『名流婦人』と『職業婦人』の分離——』では、『婦人倶楽部』における職業婦人イメージの形成と変容を明らかにした。

『婦人倶楽部』誌上における手記・レポートの成功記事や生活・人物記事で頻繁に取り上げられていたのは、「専門・技術系職業婦人」であった。また、「専門・技術系職業婦人」と「たしなみ系職業」は記事タイトルにおいて「名流婦人」などとしてまとめられ、高い社会・経済的地位や名声を得るまでの経緯が英雄的に語られていった。一方で、「事務・サービス系職業婦人」は成功記事にはあまり登場せず、職場での男性からの扱いや待遇に関する不満や苦労を抱える存在として暴露記事に頻繁に登場していた。

実用記事についてみると、「たしなみ系職業」「専門・技術系職業婦人」には成功へ向けたハウツーが説かれ、とくに美容師には成功への道が丁寧に説かれていた。一方、「事務・サ

ービス系職業婦人」の「成功」は「周りから信頼され好かれるようになること」という『主婦之友』でも同様に説かれた「処世」の側面が強調されたものであった。

論説の分析では、第1期のはじめに職業婦人は職種に関係なく総じて「社会的自立」をめざす存在としてとらえられていた。しかし、次第に「たしなみ系職業」「専門・技術系職業婦人」と「事務・サービス系職業婦人」は異なった存在とみなされるようになり、後者は二流の職業婦人として位置づけられた。第2期になると、職業と家庭の融和の議論が展開され、「事務・サービス系職業婦人」に対しては、職場に出ることは良縁が得られる可能性があるため結婚戦略上有利と語られるようになった。一方で、「職場での良縁」という考え方は、彼女らが「モダンガール型」や「すれっからし型」などの良妻賢母規範から逸脱した職業婦人にならないよう歯止めをかけ、「良縁」へ向けた職場での努力をうながすロジックとしても用いられていった。

『婦人倶楽部』では「たしなみ系職業」「専門・技術系職業婦人」、すなわち「名流婦人」と「事務・サービス系職業婦人」とのイメージの分離が進む一方で、後者は『主婦之友』と同様に「良妻賢母」と接続した存在として位置づけられていった。

第7章『『読売新聞』『悩める女性へ』における職業婦人の悩み』では、1930年代の男性読者も多く含む一般大衆紙『読売新聞』の「悩める女性へ」において多く掲載された「職業婦人の悩み」と、回答を通じて流布されていた「望ましい」対処法を明らかにした。「悩める女性へ」の「職業婦人」の相談者は、20代未婚の事務・サービス職の女性を中心であった。彼女らの悩みの種類の計量的分析からは、「職業婦人」は「恋愛・結婚」に関する悩みを多く抱え、とくに恋愛関係や結婚に進むさいに家族・親戚から反対され悩みを抱えがちであるということや、結婚に至る前に性的な悩みを抱えがちであるということが誌面に掲載される傾向が強かった。1930年代の『読売新聞』『悩める女性へ』において職業婦人は、当時の孝規範と純潔規範から逸脱する存在というイメージが流布されていたといえよう。

また、職業婦人の「恋愛・結婚」における「親・親戚からの反対」と「貞操」に関する悩みの回答では、「真剣さ」を判断基準として、当時の孝規範や純潔規範との折り合いをつけつつ、また一部では規範のすそ野を広げたり、規範を崩すロジックが生成され、当事者間の関係を尊重した回答が提示されていた。

終章「職業婦人と良妻賢母」では、日本社会における近代化のなかで形成されていった中流女性と職業をめぐるジェンダー秩序について、職業婦人イメージをめぐる排除と包摂ならびに女性とメリトクラシーの観点から考察を行うとともに、今後の課題を検討した。

各媒体における職業婦人イメージの形成と変容は、公領域（政治・経済領域）と私領域（家庭領域）の交わるところに職業婦人を位置づけると、第1期から第2期にかけての包含関係の変容と連動したものとして整理することができた。普選運動とともに婦選運動などの女性解放運動が活発化していた第1期には職業婦人は相対的に公領域に包摂され、公領域をおもな活動領域とする男性に連なる存在としてみなされていた。しかし、婦人参政権の獲得の挫折とともに女性解放運動が衰退し、女性の地位に関する社会秩序の急変が回避されていった第2期になると職業婦人は相対的に私領域に包摂され、私領域をおもな活動領域とする良妻賢母に連なる存在としてみなされるようになっていった。

また、婦人雑誌ならびに『読売新聞』『悩める女性へ』においては、中流女性の職業婦人化の回避と、中流女性が職業婦人として職場へ参入したとしても、短期的周回の参入を奨励

し、男性と同様の社会・経済的地位達成へ向けた職業的選抜から排除するという二重の排除言説が展開されていた。他方で、中流女性と職業をめぐる「成功」言説は、戦前期日本のメリトクラシー社会における職業的選抜から排除された中流女性の職業アスピレーションを「冷却 (cooling-out)」(竹内 1995) させる機能を果たすものであった。とくに、「結婚」が職業婦人の「成功」であるという意味づけは、安価で柔軟な労働力として職業婦人を労働市場の周辺に位置づけることを可能にするとともに、社会における男性支配／女性被支配関係を維持し存続させる巧妙な「冷却」であったといえる。その一方で、職業婦人イメージが良妻賢母に包摂されていったことによって女性が職場に進出することのハードルは下がり、職業に就く女性は増加していったという側面もあり、良妻賢母を利用して職業婦人は増加していったともいえよう。日本における「圧縮された近代化」(Chang 1999, 2010; 落合 2013) は女性を政治・経済の周辺に、家庭・文化の中核に位置づけることで達成されていったが、職業婦人と良妻賢母は車の両輪となって日本女性の近代化を推し進めていったといえよう。

今後の課題は、戦前期に職業婦人として働いていた女性たちの職業アスピレーションを明らかにすることである。また、戦前戦後の日本社会における女子生徒の職業アスピレーションの変容についても、量的・質的な側面から解明を進めていきたい。